とある性的な
能力開発
イチハナビ

「本当にこんな事で新しい能力を得られるんですか？」
「勿論だよ。それに新しい発見もあるだろう。それにしてもすごくいい！君はすごい素質の持ち主だ！」
「・・・んぁっ！どんどん大きくなってますよ。これでいいんですか？んぶっ」
「すごくいい！そろそろ出すからしっかり飲み干すんだよ」

んっっッッッ！」
（そんなの聞いてない！それに何よこれ、すごい匂い・・・
なんだか変な気分に・・・）
「しっかり味わってちゃんと飲み込むんだ」
「んん～～～ッッッ！」
「今度は下でも飲んでもらおうか」
んんっ♡
んぶっ♡
ぢゅぷ♡
ぢゅぷ♡

「自分で入れてみようか。」
「自分でなんて・・・そんなの無理っ・・・んっっんっ！」
（あぁぁっ！す・すごいぃ。中がどんどん広げられてくっ！）
「意外とすんなり入ったね。さぁしっかりと動いてくれ。」
「あぁっ・・・んっ・・・はぁんっ」
（すごいやらしい音でちゃってるっ！でも腰が動いちゃうっ！）
あんっ♡
はぁんっ♡
ずちゅ
ぐちゅ

「いい感じだ・・・じゃぁ中にもたっぷり飲ませてあげるよ。もしかしたら妊娠してしまうかもしれないが、新しい能力を開花させるためだ。そのくらいのデメリットは理解してるよね。」
「それも聞いてないぃッ！」
（すごいっ・・・中が熱いよぅ頭真っ白になって・・・）
あぁ♡
あぁぁ♡
ドピュッ♡
トプッ♡

（力が入らない・・・・
これからどうなっちゃうんだろう・・・・
でももう少し欲しい・・・・かも・・・・）
「まだもう少し足りないようだね。
次はこちらが動いてあげよう。」
（あっくるッ・・・・また入ってくるッ・・・・）
はぁぁ♡
はぁぁ♡
にちゅ♡

「おおすごい。吸い付いてくるような感触だ。どうやら君の体はこれを気に入ってくれたようだぞ。」
「そんなっ！んぁっ・・・でもこれ・・・好きかもッはぁッんッ」
あぁっ
んあっ♡
「じゃぁ気兼ねなく中に精子出しちゃうよ。いいよね？」
「はいッ・・・くだひゃい・・・精子たくさんくだひゃい・・・」
（あぁぁッ・・・また入ってくる・・・熱いのが入ってきてる・・・）
ドクンッ
ビュルルッ♡

「少し量が多かったかな。出てきちゃってるよ。」
「はぁ、はぁ、しゅ・しゅみま・・・せん・・・・」
「大丈夫だよ。まだ時間はあるから気の済むまで付き合ってあげるよ。」
「あひ・・・あひがとうございまふ・・・・」

「これはどうかな？」
「あひぃッ！奥にあたってるんあッ
しゅごいいいッこれしゅきぃッあぁッ
だめぇッ、イっちゃうッ、あひぃッ」
はぁはぁ
あひ♡
パーン！パーン！
じゅぷ♡
じゅぽ♡

「熱い精子いいい、きたぁぁぁ、
奥まできてるぅぅッ
中までいっぱいいい

「次はアナルにも入れてみようか。」
「はひぃ。たくさんくらひゃいぃぃ」
「この肉を広げていく感じがたまらないねぇ」
「イィッ、イギィッ！入ってくるおちんちんの形がハッキリわかりますぅぅッ」

「だすからね・・・直腸でもしっかり味わって！」
「ひゃぃ。アナルもしゅきぃ・・・精子大しゅきぃ
精子くださぃぃぃッ・・・あぐ　ぁぁぁきてるぅ
ビュルビュル出てるぅ・・・おまんこもおしりも
精子いっぱい・・・。
きっと精子の匂い染みついて取れませんよぅ。

「おちんちんくだひゃいぃ。おまんこでもでもおしりでもいいので早く栓しないと、大事な精子がでてきちゃいますぅ。」
「そんなに欲しいかい？」
「欲しいですぅ・・・・もっと精子の匂いたくさん付けてくださいぃ。」
むぁっ
ドンッ
ちゅぱ
ちゅぱ

「あっっッ！精子漏れちゃいましたぁ。
もっともっとたくさん精子ください。」
「本当に君はすばらしい能力の持ち主だ」
「はい。ありがとうございますぁす」
ぶぴゅ
ぷしゅ
ぷしゅ
んちゅ
ちゅぱ

「知り合いから新しい能力を得られると聞いてきたのですが本当にこんな事でえられるのですか？少し恥ずかしいですよ」
「その子なら知ってるよ。
今でもその子とはすばらしい関係を継続してるしね。
君も彼女が成長したのを感じとる事ができたから、今こうしてるのでしょう？」
「でも・・・・んぐっ、少しやらしい気がするのですけど・・・・んぁッ」
じゅるっ
ちゅるるっ
ちゅ
にゅちゅっ
んぐっ

「はぁんっ、そんなに激しくされたらっ・・・」
「ちゃんと中に出してあげるからね。しっかりと精液を味わうんだよ。」
「んひゃっ！中に、どくどく注がれてますぅっ、精液たくさん入ってきてるぅ」
「じゃあこのまま次へいこう」

「それではこちらの方でも試してみましょう。おやこれはなかなかですよ」
「やめっっっ、そんなの入らないっいいいい！そんなっ先っぽ入ってくる・・・」
「この吸い付き具合たまりませんねぇ。素晴らしい肉質だ。」

「はぁんっ、そんなに激しくされたらっ・・・」
「ちゃんと中に出してあげるからね。しっかりと精液を味わうんだよ。」
「んひゃっ！中に、どくどく注がれてますぅっ、精液たくさん入ってきてるぅ」
「じゃあこのまま次へいこう」

「さっきの精液が中でジュポジュポいってますぅ、
そんなに激しくされたら奥まで精液でいっぱいになっちゃいますよおおっ」
「それは素晴らしい。ではもっと奥まで届くようにしようか。」
「んぁっ！奥にごっつんごっつんってあたってますぅ、
あたるたびに頭が真っ白になっちゃいますよおおっ」
ぬかりはないよ
ずにゅっ
にゅぢゅ

「今度はしっかり奥の奥で出してあげよう。どうかな？精液を気に入ってくれるといいんですが？」
「いいっ、熱いのください、いいっ、精液大好きですっ。奥まで精液ください」
「あぁあっ！きてますっ、熱い精液なかにいっぱい入ってきてますっ」
あぁっ
んぁっ
ビュッ
ドピュ
ブビュ

「それでは今度は君が好きなように動いていいですよ。」
「しゅごいぃ、奥でゴリュゴリュいってますぅ、
もうこれ以外の事考えられませんよぉぅ
これしゅきぃ、だいしゅきぃぃっ、腰がとまりませんんんんっ」

あぁ♡
んあぁぁ♡
あぁぁぁ♡
はぁっ♡
ゴプッ♡ブプッ♡
ジュルッ♡
「素晴らしい腰つきだね。ご褒美にまた中にたっぷり出してあげよう。」
「ひゃいっ、ありがとうございまふぅぅっ、精子くださいいいい、熱いのいっぱい中にくださいぃぃぃ
あひいっ！すごいぃぃ恥ずかしい音でちゃってるぅぅ、でももっとほしいぃぃ、もっとせいしぃぃぃっ」

「そんなに精液が好きだと新しい能力を得ても、すぐに孕んでしまいますよ？」
「それでもいいですぅ、おちんぽすきぃぃっ、精液もしゅきぃっ、おちんぽジュポジュポすごいのおおっ、これもだいしゅきぃぃっ」
「また出してしまいそうですが、これ以上だすと本当に孕んでしまうかもしれません。それでもいいんですね？」
「ひゃいいっ、あかちゃんの種ください、いっぱいください、ひゃいいいぃ」

はぁっ
はぁっ
んあっ♡
さかり
さかり
さかり
さかり

ずちゅっ♡
ぐちゅっ♡
みちっ♡
ぱんぱん

「きたぁぁぁっ！ビュルビュルでてるううう、
奥までたくさんんっ、すごいのおおっ
あかちゃん孕んじゃうのおおお、
熱い精液中にだされて孕んじゃうのおおおッ」
ハァハァ
はぁはぁ
あぁぁぁ
ドピュッ
ビュルル
ビュルルル

「おちんぽ・・・・・くらひゃい・・・
私のやらしいおまんこにたくさん精子のませてくらひゃい・・・・・」
んはぁっ♡
はぁ
はぁっ♡
はぁっ♡
はぁっ♡
ぴゅるるっ♡
ぴゅるるっ♡

「んひぃっ、精子が・・・奥から精子もれちゃいますぅぅ」
「君たち二人は本当にすばらしい能力の持ち主だ。これからも能力をもっと伸ばしていこうじゃないか。」

「ひゃぃ。もっとえっちな事おしえてくだひゃぃ・・・精子だいしゅきですぅぅおちんぽももっとしゅきですぅ」

あぁっ♡
あぁんっ♡
ゴポ
ゴポ
ゴポ

「本当にこんな事で新しい能力を得られるんですか？」
「勿論だよ。それに新しい発見もあるだろう。それにしてもすごくいい！君はすごい素質の持ち主だ！」
「・・・んぁっ！どんどん大きくなってますよ。これでいいんですか？んぶっ」
「すごくいい！そろそろ出すからしっかり飲み干すんだよ」
んっ♡
んはっ♡
ぢゅぽっ♡
ぢゅるっ♡

んっっッッッ！」
（そんなの聞いてない！それに何よこれ、すごい匂い・・・
なんだか変な気分に・・・）
「しっかり味わってちゃんと飲み込むんだ」
「んん～～～ッッッ！」
「今度は下でも飲んでもらおうか」
んんんっ♡
ぶぶぶ♡
ぢゅぷぷ♡

「自分で入れてみようか。」
「自分でなんて・・・そんなの無理っ・・・んっっんっ！」
（あぁぁっ！す・すごいぃ。中がどんどん広げられてくっ！）
「意外とすんなり入ったね。さぁしっかりと動いてくれ。」
「あぁっ・・・んっ・・・はぁんっ」
（すごいやらしい音でちゃってるっ！でも腰が動いちゃうっ！）
あんっ♡
はぁんっ♡
ずちゅ
ぐちゅ

「いい感じだ・・・じゃぁ中にもたっぷり
飲ませてあげるよ。もしかしたら妊娠して
しまうかもしれないが、新しい能力を開花
させるためだ。そのくらいのデメリットは
理解してるよね。」
「それも聞いてないッ！」
（すごいっ・・・中が熱いよぅ
頭真っ白になって・・・）
あぁ♥
あぁぁ♥
ドピュッ♥
トプッ♥

（力が入らない・・・・
これからどうなっちゃうんだろう・・・・
でももう少し欲しい・・・・かも・・・・）
「まだもう少し足りないようだね。
次はこちらが動いてあげよう。」
（あっくるッ・・・・また入ってくるッ・・・・）
はぁぁ♡
はぁぁ♡
にちゅ♡

「おおすごい。吸い付いてくるような感触だ。どうやら君の体はこれを気に入ってくれたようだぞ。」
「そんなっ！んぁっ・・・・でもこれ・・・好きかもッはぁッんッ」

あぁっ
んあっ♡

「じゃぁ気兼ねなく中に精子出しちゃうよ。いいよね？」
「はいッ・・・くだひゃい・・・・精子たくさんくだひゃい・・・・」
（あぁぁぁッ・・・・また入ってくる・・・・熱いのが入ってきてる・・・・）

ドクンッ
ビュルルッ♡

「少し量が多かったかな。出てきちゃってるよ。」
「はぁ、はぁ、しゅ・しゅみま・・・せん・・・・」
「大丈夫だよ。まだ時間はあるから気の済むまで付き合ってあげるよ。」
「あひ・・・あひがとうございまふ・・・・」

「これはどうかな？」
「あひぃッ！奥にあたってるんあッ
しゅごいいいッこれしゅきぃッあぁッ
だめぇッ、イっちゃうッ、あひぃッ」

はぁはぁ

あひ♡

パンパン

じゅぷ♡

じゅぽ♡

「熱い精子いいい、きたぁぁぁ、
奥まできてるぅぅッ
中までいっぱいいい・・・・
すごいのぉ・・・・・
もっとおおもっと精子いいい
おちんちんズボズボしてええ」

あぁっ♡
んぁっ♡
ひぅ♡

ズッ♡
パンッ♡
ズボッ♡

「次はアナルにも入れてみようか。」
「はひぃ。たくさんくらひゃいぃぃ」
「この肉を広げていく感じがたまらないねぇ」
「イィッ、イギィッ！入ってくるおちんちんの形がハッキリわかりますぅぅッ」

んぎぃぃ

んんっ

きゅぅぅん♡

ズボぉぉ

みちっ

みちっ

「だすからね・・・・直腸でもしっかり味わって！」
「ひゃぃ。アナルもしゅきぃ・・・・精子大しゅきぃ
精子くださぃぃぃッ・・・・あぐ　あぁぁきてるぅ
ビュルビュル出てるぅ・・・・おまんこもおしりも
精子いっぱい・・・・。
きっと精子の匂い染みついて取れませんよぅ。
くはっ
イグッ
ドプッ
ビュルルル
ドプッ
ビュルルル
ドプッ
ビュルルル

「おちんちんくだひゃいぃ。おまんこでもでもおしりでもいいので早く栓しないと、大事な精子がでてきちゃいますぅ。」
「そんなに欲しいかい？」
「欲しいですぅ・・・もっと精子の匂いたくさん付けてください。」
ちゅぱ
ちゅぱ
むぁっ
ドンッ
ドンッ

「あっっッ！精子漏れちゃいましたぁ。
もっともっとたくさん精子ください。」
「本当に君はすばらしい能力の持ち主だ」
「はい。ありがとうございまぁす」
ぴゅるぴゅる
ぴゅるぴゅる
ぴゅるぴゅる

「知り合いから新しい能力を得られると聞いてきたのですが本当にこんな事でえられるのですか？少し恥ずかしいですよ」
「その子なら知ってるよ。
今でもその子とはすばらしい関係を継続してるしね。
君も彼女が成長したのを感じとる事ができたから、今こうしてるのでしょう？」
「でも・・・・んぐっ、少しやらしい気がするのですけど・・・んぁッ」
じゅるっ
ちゅうぅっ
ちゅ
にちゅっ
んぐっ

「それにしても君もすばらしい素質を持っているようだ。君もさぞ素晴らしい成長がみられるでしょう。そろそろイキますよ。全て飲み干してくださいね。」

「んっ！なんですかこれは」

（このむせるような匂い。なんだか頭の奥の方まで・・・）

「それではこちらの方でも試してみましょう。おやこれはなかなかですよ」
「やめっっっ、そんなの入らないいいい！そんなっ先っぽ入ってくる・・・」
「この吸い付き具合たまりません。素晴らしい肉質だ。」
んあっ
はぁはぁ
はぁはぁ
にちゅっ
にちゅっ
ぐちゅっ

「はぁんっ、そんなに激しくされたらっ・・・・」
「ちゃんと中に出してあげるからね。しっかりと精液を味わうんだよ。」
「んひゃっ！中に、どくどく注がれてますぅっ、精液たくさん入ってきてるぅ」
「じゃあこのまま次へいこう」

「さっきの精液が中でジュポジュポいってますぅ、そんなに激しくされたら奥まで精液でいっぱいになっちゃいますよおおっ」
「それは素晴らしい。ではもっと奥まで届くようにしようか。」
「んぁっ！奥にごっつんごっつんってあたってますぅ、あたるたびに頭が真っ白になっちゃいますよおおおっ」
ぬかりはないよ
ずにゅっ
にゅぢゅ

「今度はしっかり奥の奥で出してあげよう。どうかな？精液を気に入ってくれるといいんですが？」
「いいっ、熱いのください、精液大好きですっ。奥まで精液ください、いいっ、熱い精液なかにいっぱい入ってきてますっ」
「あぁあっ！きてますっ、すごいいっぱい入ってきてますっ」
あぁっ♡
んぁっ♡
ブビュッ！
ビュッ♡
ドプッ♡

んっ♡
あっ♡
はっ♡
おっ♡
おっ♡
んっ♡
ぎゅぅ♡
くちゅ♡
ぎちゅ♡
「それでは今度は君が好きなように動いていいですよ。」
「しゅごいぃ、奥でゴリュゴリュいってますぅ、
もうこれ以外の事考えられませんよぉぅ
これしゅきぃ、だいしゅきぃぃっ、腰がとまりませんんんんっ」

「素晴らしい腰つきだね。ご褒美にまた中にたっぷり出してあげよう。」
「ひゃいっ、ありがとうございまふぅぅっ、精子ください、熱いのいっぱい中にください！あひいっ！すごいっ恥ずかしい音でちゃってるぅぅ、でももっとほしいっ、もっとせいしいっ」
あぁ～
んあぁあ～
ねぇぇぇ～
はぁ～
ゴプッ
ブブッ
ジュルッ

「そんなに精液が好きだと新しい能力を得ても、すぐに孕んでしまいますよ？」
「それでもいいですぅ、おちんぽすきぃ、精液もしゅきぃっ、おちんぽジュポジュポすごいのおぉっ、これもだいしゅきぃぃっ」
「また出してしまいそうですが、これ以上だすと本当に孕んでしまうかもしれません。それでもいいんですね？」
「ひゃいいっ、あかちゃんの種ください、いっぱいください、ひゃいいぃぃ」

はぁっ
はぁっ
んあっ♡
さかり
さかり
さかり
さかり
すちゅ♡
ぐちゅ♡
みちゅ♡
ぐぢゅ
ぐぢゅ
すちゅ♡

「きたぁぁぁっ！ビュルビュルでてるううう、
奥までたくさんんっ、すごいのおおっ
あかちゃん孕んじゃうのおおお、
熱い精液中にだされて孕んじゃうのおおおッ」
ハァハァ
はぁはぁ
ぁぁぁ
ビュルビュル
ドプドプ

「おちんぽ・・・・・くらひゃい・・・
私のやらしいおまんこにたくさん精子のませてくらひゃい・・・・・」
んはぁっ
はぁ
はぁ
はぁ
くぅぅ
ぷすぷす

「んひぃっ、精子が・・・奥から精子もれちゃいますぅぅ」
「君たち二人は本当にすばらしい能力の持ち主だ。これからも能力をもっと伸ばしていこうじゃないか。」

「ひゃぃ。もっとえっちな事おしえてくだひゃぃ・・・・精子だいしゅきですぅぅおちんぽももっとしゅきですぅ」

あぁっ
あぁんっ
ゴポ
ビュルル